

ヨハネによる福音書17章1-5節 「父への子の祈り ①」

1A 子の栄光 1-5

1B 永遠のいのちの付与 1-3

2B 天の御座にある栄光 4-5

2A 御名による守り 6-19

1B みことばを受け入れた弟子たち 6-8

2B 世からの守り 9-16

3B 真理による聖別 17-19

3A 一つになる祈り 20-26

1B 父と子の一致 20-23

2B 天における集まり 24-26

本文

ヨハネによる福音書 17 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ヨハネ 16 章まで来ました。主は、弟子たちと共に最後の過越の食事を取られて、ゲッセマネの園に向かいました。弟子たちに、ご自分が父のもとに行くことを語られ、愛を尽くして語られた後でついに、父に対して祈り始められます。それはあたかも、ずっとご自分の父にあって弟子たちに語っておられたけれども、ついにそれが、父ご自身への祈りになります。それが 17 章です。

私たちクリスチャンの間に、そういったことが起こりますね。主のことを考え、それで話し、分かち合っている中で、その分かち合いは、あくまでも分かち合いであって、主に与えられたもの、主から受けたものを分かち合っているのです。ですから、そのまま祈りとしてその源に語るということはごく自然なことです。語り終えた後に、私たちは良く祈ります。

イエス様は、弟子たち 72 人を遣わし、宣教の働きをさせましたが、彼らが悪霊を主の名によって追い出したら、出て行ったという奇跡も経験して、喜んで帰っていました。イエス様も、喜んでおられました。「ルカ 10:20 しかし、霊どもがあなたがたに服従するのを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」と言われました。その直後に祈られるのです。「21 ちょうどそのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主であられる父よ、あなたをほめたたえます。あなたはこれらのことを、知恵ある者や賢い者には隠して、幼子たちに現してくださいました。そうです、父よ、これはみこころにかなったことでした。22 すべてのことが、わたしの父からわたしに渡されています。子がだれであるかは、父のほかはだれも知りません。また父がだれであるかは、子と、子が父を現そうと心に定めた者のほかは、だれも知りません。」このように、弟子たちに語りかけられて、そこにある喜びをそのまま父に語られています。

そして内容が、主が、弟子たちが幼子のようにみことばを信じて受け入れて、それを行っていたことを、神にほめたたえています。それから、弟子たちが神を知ることができているのは、そのように現そうとイエス様が定めておられたからに他なりません。私たちが学習して得るような知識ではなく、父と子の関係にある知識、信頼や親密な交わりから来る知識であることを話しておられます。

ヨハネ 17 章は、これと似た内容になります。まず、イエス様がご自身のために祈られます。父に命じられたことを行ない、その使命を果たした満足感がそこにあります。それから、弟子たちのことを祈り、彼らが世から守られるように祈られます。そしてその弟子たち、使徒たちによって、主を信じている者たち全員のために祈られます。彼らがみな、主にあって一つになるように祈ります。そして、すべてが天において一つ集まることができるように祈られています。午前と午後の礼拝で、17 章全体を網羅したいと思っています。午前は、初めの 5 節のみです。イエス様がご自身のことを祈られています。

1A 子の栄光 1-5

1B 永遠のいのちの付与 1-3

1 これらのことを話してから、イエスは目を天に向けて言われた。「父よ、時が来ました。子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。

主は「目を天に向けて」祈られました。私たちは祈りを、大抵、目をつむって、下を向いて祈っていますが、それは主の前でへりくだる姿勢として良いことであります。けれども今、主は、父のおられる天を見て、間もなくご自分が父のもとに戻ることを期待して、天を見上げているのです。おそらく、目をつむっていなかったことでしょう、目を開いて、そのまま天を、父を見上げておられます。

「父よ、時が来ました。」とされています。イエス様は、ずっとこの「時」を大切にしておられました。父が、子によって栄光を現す、定められた時であります。第一のしるしを行われた、あのカナの婚礼で、母マリアに対し、「2:4 わたしの時はまだ来ていません。」と言われました。そして、主はユダヤ人によって捕えられそうになっていましたが、誰も捕らえませんでした。「8:20 イエスの時がまだ来ていなかったからである。」とあります。いつか、捕らえられるのですが、実はそれは、イエス様が栄光を現すように定められた時であります。その時が来れば捕らえられますが、まさに今、その時です。そして、イエス様がエルサレムに入城されて、神殿におられた時にこう言われました。「12:27 今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか、『父よ、この時からわたしをお救いください。』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」ついに、この時に至ったのです。

それが、「子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。」ということです。イエス様はご自分の栄光を現してくださいと言われていますが、それはあくまでも、「子があなたの栄光を現すため」であるということ、父の栄光を現すためです。イエス様は、ご自分が神の御子である

ことを宣言されていましたが、それはあくまでも、父と一つであり、父の栄光なのだということで宣言していました。ご自身を高めることはなさらなかったのです。そして、この態度を使徒たちは後に取り、主の大いなるわざを行った時は、人々が彼ら自身に注目しようとしたところ、「イエスの御名がこれをしたのだ」と宣言しました。足なえを立たせたのですが、「使徒 3:16 このイエスの名が、その名を信じる信仰のゆえに、あなたがたが今見て知っているこの人を強くしました。」私たちの肉は、自分があたかも行ったかのように、功績が自分であるかのように見られたい肉の欲望がありますが、それは主ご自身の姿ではないし、主に倣う使徒たちの姿でもありません。

ところで、ここの「子の栄光」とは、何なのでしょう？それを知るために、主が復活された後、その姿を見た弟子トマスの応答を見てみましょう。「20:27-28 それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしの脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスはイエスに答えた。「私の主、私の神よ。」トマスは、イエス様がよみがえったという話を信じられなくて、「20:25 釘の跡に指を入れ、その脇腹に手を入れてみなければ、決して信じません。」と話していたので、主がその釘の跡と、槍が突き刺された脇腹をお見せになって、指を入れなさい、手を入れなさいと言われたのです。その復活のお姿を見て、「私の主、私の神よ。」と言って、その場でひれ伏したのです。

つまり、子の栄光とは、ご自分の肉体に傷を受け、血を流されたのに、それでもよみがえられ、その傷は、私たちの罪のいけにえとなるため身代わりに受けたものだということを示しているのです。そして、それが復活した後でも、実に天に昇られて父の右の座に着いている時でも、その傷跡は残っているということです。このいけにえによって、人々が失われていたのに、滅びなければいけないのに、その悪魔の虜にされていたところから解放し、ご自分のものとして勝ち取ってくださったことを示しています。

ですから、よみがえられ、天に昇られ、栄光の姿に輝いている主は、子羊と呼ばれ、注目され、賛美されているのです。黙示録 5 章に、天の幻をヨハネは書き記していますが、「5:6 また私は、御座と四つの生き物の真ん中、長老たちの真ん中に、屠られた姿で子羊が立っているのを見た。」とあります。屠られた姿の子羊です。よみがえられ、栄光の姿に輝いているはずの主は、十字架につけられた痕跡を残しておられるのです。その傷こそが、勝利の傷、神の栄光を現す傷なのです。この後で、天にいる者たちが、引き上げられた教会も、無数の御使いたちも、一斉に主なるイエスを賛美し、礼拝しています。罪の中で死に、滅ぶしかない者たちを、奪還したところにある栄光です。エペソ書には、「1:6 神がその愛する方であって私たちに与えくださった恵みの栄光が、ほめたえられるためです。」とあります。恵みの栄光なのです。

主が天から地上に戻ってこられる時、神の栄光と力に輝いているその姿を見る時、王たちは驚愕します。「イザ 52:14 その顔だちは損なわれて人のようではなく、その姿も人の子らとは違って

いた。」とあり、「52:15 王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らが告げられていないことを見、聞いたこともないことを悟るからだ。」とあります。そして、残されているイスラエルの民も驚愕して驚くのです。「53:1 私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか。」主の御腕とは、イスラエル人をエジプトから連れ出されたところの強い力のことです。その力強い救いを行われた方が、実は、人々からのけものにされ、打ち傷を負われ、自分たちの咎のため、自分たちの平安と癒しのために死なれた方ご自身だということです。

いかがでしょうか、世界中を見回して、どうしてあのむごい、目をそむけなくなる十字架が人々に仰ぎ見られているのでしょうか？人々が、傷だらけになっているキリストの前でひれ伏しているのでしょうか？そこに、神の文字通り血を流す、私たちのへの愛が現れているからです。

2 あなたは子に、すべての人を支配する権威を下さいました。それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。

イエス様には、すべての人を支配する権威が与えられています。当時はローマ帝国、カエサルが皇帝となり、全住民を支配していました。しかし、主がご降誕された時のことを思い出せばわかります様に、アウグストスが住民登録をするよう布告を出した、その支配する力が、逆に神によって、ベツレヘムでイエス様が生まれるようにされたのです。最も弱い存在である赤ん坊が、カエサルをさえ支配していたことを示すしるしです。そして、その御子としての力は、復活において明らかにされました(ロマ 1:4)。

御子としての支配する権威は、旧約聖書に預言されていました。「詩篇 2:7-8 「私は主の定めについて語ろう。主は私に言われた。『あなたはわたしの子。わたしが今日 あなたを生んだ。わたしに求めよ。わたしは国々をあなたへのゆずりとして与える。地の果ての果てまで あなたの所有として。』」そして主ご自身が、語っておられました。「13:3 イエスは、父が万物をご自分の手に委ねてくださったこと、またご自分が神から出て、神に帰ろうとしていることを知っておられた。」そして、ピリピ 2 章 9 節や、ヘブル 2 章 8 節には、十字架の苦しみを経て、万物がキリストの支配に置かれたことが書かれています。

その支配する権威は、「それは、あなたが下さったすべての人に、子が永遠のいのちを与えるためです。」という目的のためです。いわゆる、人を殺すのも、生かすのも、これにかかっている、というような表現がありますね。お医者さんが、その執刀のナイフを人の体に当てることのできるのは、医者免許が国によって、その厳格な試験と法による支配の中で与えられています。警官も銃の携行を、厳格な法の支配の中で与えられています。肉体の命に対して、生かすこと、殺すことのできる力が法によってしばられているように、主イエスは、父のみこころに従って、永遠のいのちを与えるか、与えないかを決めておられます。

ところで、イエス様は何度となく、「わたしを信じなさい」と言われました。「1:12 この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。」御子を信じて、それで永遠のいのちを持ちます。しかし、永遠のいのちを得たのは自分の信じる力では、全くありません。もっぱら、父なる神が子に任せて、いのちを与えとお決めになっているから、永遠のいのちが与えられたのです。

この神さまの、大いなるご計画に圧倒されます。神は、初めに造られたアダムに与えられていたその恵みを、キリストによって私たちのうちに回復させたいと願われているのです。主は初めに世界を造られ、ご自分に似せて人を造られました。そして、その世界をアダムに支配するように命じられました。しかし、アダムが罪を犯し、ご自分から離れてしまいました。アダムの子孫も罪の中に生まれ、それで神から離れたものとなっています。しかし、主は、その罪の現実も知っておられ、世の始まる前から、予め、アダムの子孫である私たちに対し、ご自分の子に取り戻す計画を立てておられたのです。「エペ 1:4-5 すなわち神は、世界の基が据えられる前から、この方であって私たちを選び、御前に聖なる、傷のない者にしようとされたのです。神は、みこころの良しとするところにしがって、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定められました。」

3 永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです。」

私はこのイエス様の言葉を読んだ時、永遠のいのちについて、大きく考えを変えることになりました。永遠のいのちとは、何か自分の命がずっと続くようなイメージを持っていました。死んだ後も続く命です。しかし、そのような量的なものだけではない、いや量的なことよりも、質的なことです。神を知ること、そしてイエス・キリストを知ることです。これは、これまで見てきたように、人格的に、親密に知ることです。交わることです。交わって一つになることです。これが知ることであり、つまり、神とキリストを知ることこそが、永遠のいのちであり、死んだ後に天国に行ける切符みたいに思ったら大間違いだということです。ですから、天の御国に入ろうと思っていたところが、拒まれる人たち、主よ、主よ、と言っている人たちが多くいるとイエス様は言われます。「マタ 7:23 わたしはおまえたちを全く知らない。」と彼らに言われました。

私たちはこの方を知ること、ここに情熱が注がれているのでしょうか？自分が何をすれば、うまくいくのか？とか、そういうことを考えていないのでしょうか。群衆がイエス様に、「6:28 神のわざを行うためには、何をすべきでしょうか。」と尋ねたら、「6:29 神が遣わした者をあなたがたが信じること、それが神のわざです。」と言われました。信じること、これは信頼することであり、信頼することによってイエス様を知ることになります。

2B 天の御座にある栄光 4-5

4 わたしが行うようにと、あなたが与えてくださったわざを成し遂げて、わたしは地上であなたの栄光を現しました。5 父よ、今、あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。世界が始まる前に一緒に持っていたあの栄光を。

イエス様は、生まれた時からずっと神の栄光を現すために生きておられましたね。お生まれになった時、天の御使いたちは、「いと高き所に、神の栄光が」と言いました。そして、しるしを行われて、それらがすべて、神の栄光を現していました。

そして今、ついに主は、「あなたご自身が御前でわたしの栄光を現してください。」と言われていきます。すべてのことを成し遂げて、父によって遣わされた使命を果たして、それで父のところに戻り、父と共にいるところにある栄光です。1章18節に、「父のふところにおられるひとり子の神」と紹介されています。父と共におられるところにある栄光です。冒頭にありましたね、「1:1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。」ここにある栄光です。パウロはエペソ人への手紙でこう言っています。「1:20-21 この大能の力を神はキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上でご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世だけでなく、次に来る世においても、となえられるすべての名の上に置かれました。」

新しい天と新しい地において、天からのエルサレムが降りてきます。そこにある幻に、主が御父と持っておられる栄光が良く表れています。「黙示 21:23 私は、この都の中に神殿を見なかった。全能の神である主と子羊が、都の神殿だからである。」「21:24 都は、これを照らす太陽も月も必要としない。神の栄光が都を照らし、子羊が都の明かりだからである。」「22:1-2a 御使いはまた、水晶のように輝く、いのちの水の川を私に見せた。川は神と子羊の御座から出て、都の大通りの中央を流れていた。」主が、世の始まる前から父と一緒に持っていた栄光が、最後にはこのような形で、イエス様のもとされた者たちを招き入れて、輝いているのです。太陽も月も必要としない光、そして、いのちの水、すなわち永遠のいのちが流れ出る御座に着いておられます。父と子の関係にある、いのちです。そして私たちの罪のために父がご自分の独り子をお与えになったところにある、いのちです。その中に私たちが永遠に過ごします。このことについては、17章の最後、イエス様の祈りの締めくくりでも出てきます。

私たちがこの地上にいるのも、これが目的です。神の栄光、そしてイエス様の栄光を現すために生きています。自分が何をしているのか？自分が何をすればよいのか？そういった自分に焦点を合わせた、自分中心ではなく、神とイエスを信じ、知るという、この方を中心にした生活です。この方に満ちることが私たちが生きている目的であります。「黙示 4:11 みこころのゆえに、それら(万物)は存在し、また創造されたのです。」神のみこころ、悦びのゆえに創造されました。」